
the day which met the angel

倉橋紗由深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the day which met the angel

【ノード】

N6529F

【作者名】

倉橋紗由深

【あらすじ】

世界の隅にある、小さな村。そこには暮らす少年が、夜中に忍び込んだお化け屋敷で出会ったのは・・・。

序章（前書き）

それほどありませんが、ほんの少し残酷な表現があります。血の出るものがお嫌いな方は読まないことをおすすめします。

”運命”って、本当にあるのかな。

もし、あるのなら、もう一度、キリと会いたい。

キリと会えたなら、今度こそ、ちやんと、いいたいんだ。

お会いてくれて ありがとうございます

今度は ぼくが 帰るから

僕が育つたのは、大陸の端っこにある小さな小さな村。国の偉い人が変わつてもあまり影響はなく、お触れを見て、ああまた国境が変わると感じる程度。影響があるとすれば、こんな辺鄙な村からも男手が次々と借り出され、何をするにも不自由さが見え始めているということ。

僕はこの小さな小さな村で、未婚の母から生まれた。父親は僕の存在を知る前に戦争で死んでしまった。召集されるのがもう少し遅ければ、結ばれていたかもしれない。僕が生まれることを、知ることができていたかもしれない。しかし、彼はどれも叶うこともなく、どこかの土の埋まつてしまつた。

8歳になる前に母が流行り病にかかり自害した。母が罹つたのは、「天使病」という病だ。

ある日、母が寝室で着替えをしているところに僕が入つて、見つけたシリシ。

「あ、母さんの背中に変なアザができる。まるで天使になつたみたいだね」

僕のその言葉に母の顔色が青ざめていく。母は恐ろしい形相で僕に、何度もそのアザのことを聞いてきたが、僕の答えは何度も同じ。天使のような羽根が生えたアザがあるというもの。

その場に僕を取り残し、慌てて家を飛び出した母。

その時は知らなかつたが、町医者のところに駆け込み、そのアザを見せていたそうだ。

戻ってきた母は、たくさんの食べ物を抱えていた。

その日の夕食は豪華だつた。父のいないこの家のどこにあつたか、信じられなかつたが、とにかく嬉しかつた。とても特別な気がした。

その夜、いくつかの小銭を僕に渡し、

「いいかい。お金は本当に必要なときに使うんだよ。それから、も

しものときは、村長さんに言つてあるからね

「うん。分かつた。大切にする」

「そうよ」

そして、僕の頭を優しくなでてくれた。
優しい優しい笑顔のまま、

「ごめんね」

そういうと、母はもつていたナイフを、自らの首に突き刺した。
首からは大量の血が噴き出し、目の前にいた僕に降り注ぐ。
スローモーションのように倒れる母を、僕は見ていることしかで
きなかつた。まだ、何が起こっているのかがわからなかつた。

まだ温かい赤い、雨を浴びながら、僕の意識は途切れた。
次に意識がつながつたのは、母が自害して、3日目の昼頃だった
と聞いている。そばにいたのは、近所のおばさんだつた。

たまたま用があり、朝早く家に訪れると、冷たくなつてゐる母と、
真つ赤に染まる僕がいたという。どちらも死んでいると思い、医者
を呼び、僕が無傷であることが分かつたそうだ。

まだ、僕は感染していないことも。

母を死に追いやつたこの「天使病」というのは、厄介な流行り病
だつた。発病すると、まるで獣のようになり、周りにいる者を見境
なく襲う。爪をたて、歯を立てて。だから、大半は発病前に殺され
ることになつていた。周りにいる者たちを傷つける前に、公開処刑
を行つていてとか感染者が一人でも現れると村ごと焼き尽くしたと
か様々なウワサが飛び交つていて。感染者の中には、母のように自
害する人も珍しくなかつた。

世界の人たちの3人に1人は、この病で家族を亡くしているほど、
蔓延してらしい。

そして、この病気の恐ろしいところは、ある日突然流行り、村の
半数近くの犠牲を出した後、何事もなかつたように、感染者が消え、
別の村に感染者が現れていた。まるで、増えすぎた人口を調整して
いるかのように。

病んだ世界に、僕はいたんだ。

人々が眠りにつく静かな夜。そこをしのび足で歩く人影がある。足音を立てないように静かに素早く歩いている。よく見るとまだ幼い少年。怖いのか少し震えている。

数十秒後、とある家の前で足を止めた。ようやく家にたどりついたのかと思ったが、彼は家の入り口から入るのをためらっている。暫く入り口の周りを見ているが、なかなか入ろうとしない。何かを探すように家の外を歩き出した。

家の周りを注意深く見ていると、小さな小さなすき間に見つけた。彼は嬉しそうにそのすき間に自分の体が入るのか試すように、中へと入つていった。

「うわーーー

中に入れた喜びから、つい声が漏れてしまった。

慌てて口を押さえる。彼の声に気づいたモノはいないらしい。といつか、人の気配すらない、ようだ。ほつと胸をなでおろす。

再び彼の冒険が始まる。明かりがないため、暗い室内を歩くことになる。

「こんなことなら、なんか明かりになるもの、持つてくれればよかつた。

長く暗い道を歩いてきてはいたので、そこそこ目は慣れてきてはいた。しかし、室内だと外の星や月の明かりが外より少なくなる。その分、死角は増えてはいる。

ああ、どうしてこんなところ、やめやつたんだろ？。

「ここにきて、彼の中に後悔が生まれる。

そもそも彼がここにいる理由。

彼がいるこの家が深く関わっている。実はこの家、この村に住む子ども達の間で、お化け屋敷としてしられているのだ。

いつからかは知らないが、誰も住んでいないのに、建っている家。子どもなら興味を持つもの。しかしその家に近づく子ども達に大人たちが口を揃えて言うのは、

「ここには怖いお化けが住んでいるから、絶対、中に入つてはいけないよ」

第一、入ろうにもカギは開いていない。中をのぞくにも窓がすりガラスのためにうまく中が見えない。それがさらに子ども達の好奇心をくすぐる。

とはいっても、やはり子どもだ。お化けがいるのは、怖い。でも見てみたい。

そして、彼もその一人。やつぱり興味はあるが、お化けには会いたくない。

でも、彼がここにいる理由。それはただ一つ。
子どもたちの誰かが言ったのだ。

「お化けって、死んだ人がなるんだ。それも死にたくないのに殺されたとか、病気になつて苦しんだ人がなるらしいよ」

「えー、ウソだー。そんなことでお化けになるんだつたら、この世界、お化けだらけだぞう」

「だつて、そう聞いたんだ。ヒック」

だんだん語尾が小さく弱くなつていく。顔を赤くして目が潤みだした。遠巻きに見ていた子ども達も周囲に集まり出し、この話はここで一旦区切られた。

しかし、話はまだ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529f/>

the day which met the angel

2010年10月19日21時28分発行